

国外調査（ポートランド研修）より学んだ事

秋田県横手市 佐藤 良人

今回の8日間の国外調査（ポートランド研修）において、市民へのインタビューや行政職員、市民団体のリーダーによる実践に基づく活動のお話を聞かせていただき、普段経験でない、ポートランド市を動かしている原動力に直に触れ、聞く機会をいただけた。

ポートランド研修前の事前講義等で、アメリカと日本における地方行政システムの違いや、住民参加意識の違いを学び、何か日本とはすごい違いがあるのではないかという思いを抱きながら今回の国外調査に参加した所であった。

しかし、行政職員においては、実は日本の行政職員とそう違いはなく、地域の問題解決に対して、悩みながらも事業等の推進により解決を進めようとする姿を見る事ができた。

また、市民においても、市民参加意識の高い人もいれば、現状に満足しており、何も参加していないという人もいた。行政職員のお話や市民へのインタビューをした際、このような事実を知り少しほっとしたような感があった。

では、アメリカと日本の違いは何か？となった時、一つのキーワードになると思われるのが、行政職員や人々の『思い』に対して向かい合う姿勢や行動にあると思った。

この点に関しては、行政職員、市民ともに熱い思いがあり、それを今回の研修で感じる事ができたと思う。行政職員においては、事業の推進には市民の『思い』の集約による合意形成が必要であるという考えが根本にあり、また、市民においては自分達の『思い』を達成する為に、大小様々な活動を展開していた。また、行政においてリーダーの存在しない地域においては、リーダーを育成する事業等も行われており、市民の『思い』をいかに行政に反映させるかを常に考えた体制づくりが行われていた。

日本においては、行政職員が国や県の事業に基づき淡々と事務を進めたり、市独自の事業を立ち上げるにおいても、狭い範囲での事業検討を行った上でその事業が立ち上がる事が多く、そこには、市民の『思い』が不在となる事が多々あるように思われる。そのような事業においては、事業が終われば活動も終わってしまう様なものが多くある気がする。その中でも、うまくいく事業というのは、運よく市民が事業の目的に賛同いただき継続できているにすぎないのかもしれない。

ポートランドにおいては、市民の『思い』が事業に入り込んでなければ成功はしないという事がごく自然に、行政職員や市民に染み込んでいる気がした。

行政とは、市民の『思い』をくみ取り、地域をどうする（どうしていく）かの合意形成を図った上で、事業を作り、市民を巻き込み、実践し、地域を良くしていく組織であるという、根本的な事を今回学ぶ事ができたと思う。

しかし、日本において、この事をすぐに実践できるわけではなく、我々地方行政職員は市民の『思い』をいかにすれば集約できるかを常に考え、地域に入り込んでいく訓練が必要だと思った。また、市民においては、行政が提案する事業に対し、自分の『思い』を発信

する訓練をしていかなければならないと思った。

我々は、人間であり、一人一人の考え方も違い、多様性の中で地域に存在しているという事にまずは気づくこと。また、その中で、話し合いを重ね、合意形成を図った上で、多くの人の賛同が得られる事業、まちづくりをしていく事こそ我々地方行政職員の使命であると感じた。

意見がぶつかる事は怖い事ではない。意見を言わず、自分の『思い』が反映されずに地域が形成されていく事こそが怖い事である気がした。

我々行政職員は、地域の『思い』を引き出し、そして受け止め行動せねばならない。